様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３４７４

研究課題名（和文）「食」をとおした共在の様式に関する基礎的研究―東南アジア産の中華食材に注目して

研究課題名（英文）Fundamental study for mode of co-existence through foodstuffs for Chinese dishes in Southeast Asia

研究代表者
佐久間　香子（Sakuma, Kyoko）

東北学院大学・経済学部・講師

研究者番号：５０７５９３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、ボルネオ島マレーシア領サラワク州と香港の2つの調査地を設定した。それは、サラワク州で生産されるツバメの巣などの食材が、香港における東南アジア華人女性たちによって子孫繁栄と美を担保する財として、いかに贈られるのか、その文化的文脈を明らかにするためである。
　香港での政治情勢不安定化と治安の悪化、および新型コロナウィルス感染症が地球大に感染拡大により本研究課題の期間中のほとんどの海外調査計画は断念した。だが、香港の情勢悪化前に実施した香港での調査、学生の頃から調査してきたサラワク州は知人とオンラインによるインタビューを重ね、ツバメの巣の流通や贈る理由に関するデータを収集できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国外における研究調査活動ができなくなったため、単著の刊行や、研究者コミュニティでの報交換と文献の渉猟と分析に切り替えた。その間にオンラインでの研究会や学会を最大限活用して交流の輪を広げたことで、これまで発表したことのない学会（日本華僑華人学会）でパネル発表する機会や、コラムなどの研究者コミュニティ以外に研究成果を発信する機会を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：　For this research project, two research sites were established, one in Sarawak, a Malaysian territory on the island of Borneo, and the other in Hong Kong. The purpose of this study was to clarify the cultural context in which foodstuffs such as edible birds' nests produced in Sarawak are presented by Southeast Asian Chinese women in Hong Kong as goods that ensure their offspring's prosperity and beauty.
　Due to the unstable political situation and deteriorating security situation in Hong Kong, and the global spread of the COVID-19, most of the overseas research plans for the duration of this research project were abandoned. However, the research in Hong Kong, which was conducted before the worsening of the situation in Hong Kong, and in Sarawak, where I have been conducting research since I was a Graduate student, I was able to collect data on the distribution of edible birds' nests and the reasons for giving them away through a series of online interviews with acquaintances.

研究分野：文化人類学

キーワード：資源　交易　嗜好品　ボルネオ　華人

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アパデュライ［Appadurai 1986］が先鞭をつけて進められてきたモノの人類学研究は、モノそのものを焦点化し、モノが異なる空間と時間を移動する過程で価値をいかに変化させるかを捉える方法論を生み出してきた。しかしその一方で、モノが価値変化を通じて当該社会の人間関係の権力関係、生命の継承、そして共在の様式にいかに作用するのかについて十分に論じられてきたわけではない。

ツバメの巣が中国古代王朝の皇帝や貴族の間で「長寿の秘薬」として食されるようになったのは明王朝期だが、ボルネオなど東南アジア島嶼部からシンガポールや香港をへて中国へ輸出されるようになったのは、18 世紀後半以降のことである。以来、ボルネオにおけるツバメの巣の価値は、仲買の華人商人、そしてその消費地社会においてそれぞれ異なる価値が付与されてきた。生産地社会においては、洞窟内部に採集キャンプを設けて日々、命の危険と隣り合わせの採集活動の見返りに、華人商人らとの取引で採集者らは高額の売上金を得ることができる。さらにその売上金は生産地社会の首長層らによって大規模儀礼や威信財の購入の財源に充てられることで、首長層の権威を再生産することにも寄与してきた。他方、ツバメの巣を消費する中国および世界中に拡散する中華文化圏の人々にとって、健康、長寿、美容など生命力の活性化を担うモノとして広く重用されてきた。現在、ツバメの巣は中華文化圏において、妊娠した暁には母子の健康と子孫繁栄の願いを託して、血縁を問わず、実／義親族から妊婦（娘／嫁）に惜しみなく与えられる資源として重用されている。このようにツバメの巣は、生産地から消費地への移動に伴って付与される価値が変化するのと同時に、消費地社会において人と人を強く結びつけているモノである。

ツバメの巣のこうした特徴に鑑みれば、モノの人類学研究はその資源の採集、交易、贈与交換や共食といった共在性がどのような人間関係を生成・更新してきたのかについて、まだ十分に論じられてはいない。すなわち、モノに関わる人間の情動やオラリティの議論はまだ端緒に着いたばかりの領域である。

より具体的に言えば、ツバメの巣の消費社会である中国人社会は、明確な父系単系システムを特徴とする社会である。こうした社会において、女性を主たる受け手として、贈り／贈られる（贈らない／贈られない）人と人との関係や、ツバメの巣を共食する／しない人と人との関係の動態は、転じて、「他人」から「家族」へ／「家族」から「他人」へといった「血縁」とは別の論理でしか説明しえない人間関係の動態と深く結びついている。そのため、同姓集団、祖廟祭祀集団とは異なる華人ネットワークの広がりを照射することが期待される。

２．研究の目的

親族関係において、モノの関係が人の関係に依存しているということは、人類学においては既によく知られていることである。例えばストラザーン［Strathearn, 1988］は、消費とは単純な自己補充の問題ではなく、関係性の認識と監視であり、親族関係と同様に、食べることもトランスパーソナルなものであることをメラネシアの事例から論じている。他方で本研究では、モノを介した人と人との関係を議論する枠組みのための基盤となる研究を目指す。

具体的な本研究の目的は、時間と場所をまたいだツバメの巣の流通経路そのものを考察の対象に収めることで、人と人をつなぐモノの作用と動態を明らかにすることである。具体的には、ツバメの巣の採集者、仲介商人、消費者の各流通経路におけるモノの価値体系の揺れ動きに注目する。

３．研究の方法

人類学者は「商品」と「ギフト」とを異なるシステムで価値が付与された象徴的なものとして、対比させてきた。これに対してツィン［Tsing 2013；2015］は、商品とギフトは明快に切り分けられないし、商品として市場に出て消費されるまでの商品連鎖のなかで、モノは度々「ギフト」になる。つまり、ギフトと商品の変換を何度も繰り返しているのであり、その中で、ギフトが取り除かれて資本主義的商品になる「浄化」の動態を、マツタケを事例に見事に記述している。

しかしながら、この「浄化」は、他の多くの森の資源が採集者、仲買人、専門業者、消費者を経る過程を描き出す民族誌的枠組みというわけではない。ツバメの巣という資源の最終的な消費者それぞれの歴史と調査で聞き取った個々人の経験に鑑みた場合、マツタケのように最終的に資本主義的商品になるわけではないのであり、本研究課題の目的のためには異なる枠組みを模索する必要がある。本研究課題の研究方法は以下のとおりである。

a)　「延長されたフィールド」（extended field）としての産出地と消費地

本研究の調査地は地理的に距離を挟んだ地域を対象としている。民族誌研究の対象のグローバル化が不可避である昨今、対象の動きに合わせて調査者も移動し、フィールドを拡張していくことが珍しくなくなってきた［Marcus 1995］。だが本研究は、非連続な複数の対象の考察からアプローチする「マルチサイテッド・エスノグラフィー」ではなく、むしろ、パエレガード

［Paerregaard. 2008］が提唱する「延長されたフィールド」（extended field）を志向するモノ研究である。

本研究課題では、ボルネオ島マレーシア領のサラワク州と香港の 2 つの調査地を設定した。それは、サラワク州で生産（採集、加工）されるツバメの巣などの食材が、香港における東南アジア華人女性たちによって子孫繁栄と美を担保する財として、いかに贈られるのか、その文化的文脈を明らかにするためである。

しかしながら、実際に香港やサラワクに渡航してフィールドワークを実施することができたのは研究課題の初年度だけとなった。なぜなら、香港では、政治情勢不安定化と暴動やテロによる治安の悪化、さらにはフライトスケジュールも定まらない状況となった。さらに、2020 年の春節後に予定していたマレーシアでの調査は、新型コロナウィルスがアジア、そして地球大の感染が拡大した。これにより、マレーシアでの調査カウンターパートからも、渡航の延期を打診されたため、予定していた双方の調査地でのフィールドワークを断念し、オンラインによるインタビューや研究会、文献の渉猟と分析を重ねて研究を遂行した。

b) オラリティと共在の視角

モノの生産から消費までの過程を人類学研究の対象とする本研究において、特にモノと人、そしてモノが人と人との関係を生成、更新する動態を捉えることを重視している。その際の研究視角として本研究ではオラリティと共在を採用する。なぜなら、健康、美容、長寿など、生命観に直結する効果が期待されているツバメの巣に注目する際、発話のみならず、モノに関する知識、共食の場、贈与交換といったオラリティを通じて、モノと人の関係と人と人との強いつながりのあり方を浮かび上がらせることは、最良の研究視角だといえるからである。

４．研究成果

a) 採集者コミュニティにとっては威信財獲得のための交換財

中央ボルネオにおいて 100 前後の世帯がロングハウスと呼ばれる長大な長屋を数棟に集まって暮らす村落において、生業活動の一つとして少なくとも、1880 年代には採集と交易がされてきた。交易相手は、ジェームズ・ブルックを始祖とする私的な王国（サラワク王国）で保護された華人商人たちである。ツバメの巣が採集できるのは、ボルネオでは主に一部の洞窟の奥深くだ。ツバメの巣のある洞窟とその周囲の森を慣習的に利用してきたロングハウス・コミュニティや、遊動狩猟採集民たちが採集してきた。ロングハウスの場合、採集の時期や商人との交易は首長層に管轄権があった。それら林産物の交易から得られる財は、威信財の購入や大規模送儀礼などに充てられることで、首長層の権威と威信を保つのに寄与してきた。さらには、資源のある限られた場所には、狩猟採集民に番をさせるといった、民族間関係も利用された。

b) 商人によるランク付け（価値）

採集されたツバメの巣は、華人商人から出稼ぎインドネシア人女性らの手によって選別とゴミ取り、成形され、色と形によって格付けされる。等級の高いものは、贈答用のパッケージにされる。形の崩れたものは寄せ集めて安く売られるか、加工品用として仕訳けられる。

一級品は色が白く、洞窟の壁に張り付いていた時のままのラグビーボールを縦に割ったような形状が一切崩れず残っていて、さらに、鳥の羽くずなどのゴミがきれいに取り除かれたものである。形状とゴミ除去が完璧でも、等級が下がってしまうのは、黒っぽくくすんだ色をしたものである。しかし、全ての黒いツバメの巣が低い等級になるわけではない。数百個に 1 個の割合で、赤黒い色が混ざっている場合、一級品の白を飛び越えて最上級ランクに躍り出ることがある。その色は、親鳥の血であると説明され、血が混ざりこんだツバメの巣は特別に強力な薬効があるといわれているためである。

つまり、華人商人はロングハウス住民から黒ずんだツバメの巣に安く買いたたくことができる上に、選別過程で価値が大化けすることもありえるという損しない商品となる。このように、採集する森の民には関係ないが、華人商人にとっては重要な指標をして意味を持っている。

ツバメの巣の採集の成功は、マツタケと違って運ではない。白い上級品が採れる洞窟、黒ずんだ巣が採れる洞窟は決まっている。巣の違いは営巣するアナツバメの種の違いであり、どの洞窟にどの種が生息するかは周知のことなのだ。黒ずんだ巣しか取れない洞窟から、白く美しい巣が採れることはない。ツバメの巣の値段を高くしているのは、その採集活動が命の危険を伴う作業と同時に、数週間から数か月間洞窟にこもって採集を続けるという、森の民以外には耐えられそうにもない活動であることに起因する。この意味では、フィジーにおいてマッコウクジラの歯の価値が「人間の命の値段」（Wilkes 1845: 103）と表現される文脈に近いだろう。

c) 交換財→商品→ギフト

上記にみてきた indigenous な文脈の上に成り立つツバメの採集は他方で、当該社会では誰も食べない物である。ツバメの巣が、ギフトになるのは消費者にわたる段階でのことである。

- 春節用の贈答品
- 家族の結婚祝い（実の娘でも義理の娘でも、基本的に女性が妊娠することを願って贈られる。男性に贈ってはいけないわけではないが、主に女性向けの贈答品）

この 2 つは、主に親族間でやり取りされるギフトであり、そこに込められた意味はリプロダクションである。このように、ツバメの巣は、資本主義経済の一端を成すと同時に、看過できないほどに親族関係を維持・強化することを期待されたギフトであり続けている。

d) 価値は新しく作られる

上記の一方で、以下のように、近年付与されたであろう薬効や消費の仕方もある。

- フェイシャルエスエステのカジュアルな代替品：結婚や妊娠といった人生の特別なステージに限らず、日常生活の中で、20 代前半から中年の女性の間でみられる消費の傾向。
- のどの薬：これは、2015 年にボルネオ島インドネシア領、インドネシアのジャワ島を中心に史上最悪の大規模森林火災が発生したことに起因していた。この火災により近隣のマレーシアシンガポールにも有毒物質を含んだ煙が飛来し、学校も役所も閉鎖、数万人が呼吸疾患で入院、視界不良で飛行機も飛べないなどの状況が 1 カ月続いた。この時に、半島部のマレーシア華人を中心に、ツバメの巣をボイルしたものを冷蔵庫に常備するようになり、このよう方が定着しつつある。
- 養殖と天然：2000 年代に入って以降、マレーシアではコンクリート製の多物の中で白い巣を営巣する種のアナツバメに巣作りさせて、ツバメの巣を養殖する事業が大流行している。サラワク州の州都クチンの華人商人に話を聞いたところ、天然ものの価値が高くて養殖物の価値が低い、単純な価値の線引きがされているわけではなく、むしろ両者は、消費者の用途や好みによって分別されている。

ここに記した研究成果の一部はすでに論文や学会発表として公表したものであるが、その多くはまだ論文執筆の途上にある。加えて、新型コロナウィルス感染症の感染拡大によりフィールドワークの計画が大幅に変更となった反面、国内外の研究者とオンラインでの学会や研究会への参加を通して、研究ネットワークを拡大することができたことは、本研究のもう一つの成果である。今後は、未発表の研究成果の公表に取り組むと同時に、これまでの研究ネットワークとデータを活かして、本研究をさらに発展させていきたい。

<u>引用参照文献</u>

Appadurai, Arujun. 1986. *Social life of Things: Commodities in cultural perspective*. Cambridge UP.

Marcus 1995.“Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography”, *Annual Review of Anthropology*24, 95-117.

Paerregaard, K. 2008. *Peruvians Dispersed: A Global Ethnography of Migration.* Rowman & Littlefield.

Reid, Anthony. 1994. “Early Southeast Asian categorizations of Europeans.” In *Implicit understandings: Observing, reporting, and reflecting on the encounters between Europeans and others in the early modern era*, edited by Stuart B. Schwarz, 268–94. Cambridge: Cambridge University Press.

Strathearn, Marilyn. 1988. *The gender of the gift: Problems with women and problems with society in Melanesia*. Berkeley: University of California Press.

Tsing, Anna. 2013. Sorting out commodities: How capitalist value is made through gifts, *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 3(1): 21-43.

Tsing, Anna. *The Mushroom at the End of the World*. Princeton University Press, 2015.（＝チン，アナ『マツタケ―不確実な時代を生きる術』赤嶺淳訳，みすず書房）

Wilkes, Charles. 1845. *Narrative of the United States exploring expedition*, Vol 3. Philadelphia: Lee and Blanchard.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐久間　香子	４．巻 32巻1号
２．論文標題 森の錬金術―ツバメの巣の生産から消費まで	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 95-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 佐久間香子
２．発表標題 ツバメの巣を贈るということについて
３．学会等名 東アジアにおける人の移動と交易 ―多文化空間・場所・アイデンティティの動態に着目して―
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐久間香子
２．発表標題 Hunting for well-being
３．学会等名 East Asian Anthropological Association Annual Meeting 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐久間香子
２．発表標題 森の錬金術 ―ツバメの巣の生産から消費まで
３．学会等名 2019年度 立命館大学 国際言語文化研究所連続講座「食と政治―胃袋から支配する」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 佐久間香子	4．発行年 2020年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 416
3．書名 ボルネオ　森と人の関係誌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関